

## 共通語と方言の接触：共通語使用の価値について

著者	沖 裕子
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 1: 1-10 (1980)
発行年月日	1980-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10091/00022348">http://hdl.handle.net/10091/00022348</a>

# 共通語と方言の接触

## —— 共通語使用の価値について ——

おき ひろ こ  
沖 裕 子

### 1. はじめに

方言と共通語が接触した際に、二言語併用的な現象をひきおこすか、それとも、その方言の中で共通語が、いわゆるていねいな表現として待遇的に高い価値を表わすコードとして機能するようになるかは興味を持たれる事象であるといえよう。

方言と共通語が接触した際に、共通語がその地域の言語生活においてどのような価値を持つようになるかは、共通語の波を迎える側の方言体系の性質によってそれぞれ異なった相をみせることであろう。従って、共通語が方言と接触した際生まれる機能、あるいは価値というものは、単純に一般化できるものではない。

そこで、一般化の前段階におけるひとつの事例研究として、場面と待遇表現使用の調査から、ハチジョウモトキツノハシ八丈町末吉洞輪沢における共通語の使用のされ方を分析してみたい。

なお、八丈島方言は敬語形式の豊かな方言として知られており、またその方言体系は方言区画の上からみても特色ある体系であるのは周知のことである。

### 2. 待遇的場面と共通語の使用

地域の方言生活において共通語がどのように使用されているかを、待遇的場面における言語使用を調べた調査からみていくことにする。

対象は、八丈島末吉洞輪沢に住む12才以上（中学生以上）の在住者全員で、男44人、女44人の計88人である。そのうち調査しえた人数は、男28人、女32人、計60人で、達成率は約7割であった。その中で八丈島出身者を対象とし、両親ともに八丈島出身者ではなく、本人の言語形成期も八丈島以外のところの話者は、今回の分析の対象からはずした。調査は、1978年6月から7月にかけて筆者一人で行なった面接調査である。（注1）

本稿では、「ココニ アンタノ ナマエヲカケ」という時の表現（下線部）をとりあげる。これについて、待遇的に異なった相手（場面）に対して言う時の言語表現を調べ、相手と使用言語との関係から、そこに用いられる共通語の使用のされ方を分析していこうとするものである。

話しかける相手から構成される待遇的場面は、次のように設定した。（質問順）

○島のことばで、自分と同じ調子で話す人。

〔段階dとする〕

○自分より目下にあたる人で、島のことばで気軽にぞんざいに話す人。

〔家族だったら段階 f に、それ以外は段階 e にする〕

○島のことばで、段階 d の人よりていねいに崇めて話す人。

〔段階 c とする〕

○島のことばで、段階 c よりもさらにていねいに崇めて話す人。

〔段階 b とする〕

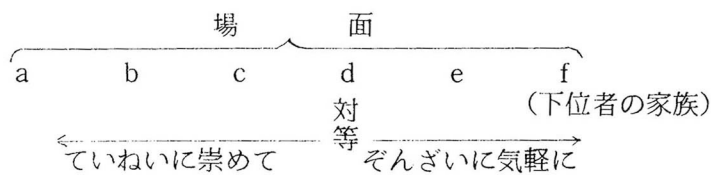
○島のことば、標準語ということなしに、自分が一番ていねいに話す人。

〔段階 a とする〕

このように、a から f までは次のような場面の高低を作るようにした。

表 1. 洞輪沢における対人場面

話者番号	年齢	場 面					
		a	b	c	d	e	f
M-1	73	郵便局長			T.O	m	U.O f 子供
M-2	70	役所の人		年 寄 り	S.O	m	子供
M-3	68			T.O m	M.O	m	Ta.F m
M-4	67	組 合 長	見ず知らずの人	S.O f	S.O	m	弟
M-5	64	見ず知らずの人	教員・役場の務め人	S.O f	友人		子供
M-6	61	見ず知らずの人		A m	隣 人		子供
M-7	61	見ず知らずの人	郵便局長	T.O m	I.O	m	Te.O m 子供
M-8	52	見ず知らずの人	T.O m	M.O m	T.H	m	子供
M-9	51	T.O m		S.O m	M.N	m	弟
M-10	51	見ず知らずの人	N m	F.O m	M.A	m	子供
M-11	46	子供の担任 民宿の客	S.O m	N.A m	Yu	m	Y.O m 子供
M-12	46	N 先生	N.O f	Ta.O m	M.A	m	K.M m 子供
M-13	41	タクシーの客 上 司	Ma m	Et. m	S.I	m	S. m 子供
M-14	39	タクシーの客		K.O m	S.O	m	子供
M-16	33	上 司	U.O f	Tu.O f	N.O	m	
M-17	30	店 の 客	女 古	S.O m	K.S'	m	O. m
M-18	28	町役場の人	S.O m	Hi. m	F	m	K.A m
M-19	28	見ず知らずの人	T.O m	N.F m	T.F	m	Ik. m
M-20	28	組 合 長 見ず知らずの人		Ma. m	K.S'	m	Yas. m
M-21	23	上 司	上司の奥さん	N.F m	Ya.	m	弟
M-22	18	見ず知らずの人 警察の人		U.O f	T.S'	m	近所の子供
M-23	18	店 の 客	社 長	N.H f	K.A	m	弟
M-24	16	担任の先生			Hi.	m	To. m
M-25	15	担任の先生		H.O m	T.O	m	Tug.O m
M-26	15	見ず知らずの人 年上の人	担任の先生	Ta.O f	Tu.O	m	Ha. m 弟
M-28	14	見ず知らずの人		先 生	Mi.	m	弟



さて、このように設定した  
場面 a から f までについて、  
それに該当する人物（自分が  
そのような意識で待遇してい

ると思われる人物）を、差し支えなければという条件つきで、具体的にあげてもらい、あげられた相手の次のような属性を問うた。

- (1) 年齢      (2) 職業      (3) 出身地(末吉の人か否か)      (4) 家族か家族外か

話者が、この6場面の中である待遇の段階を持っていないか、あるいは持っていて、現在の自分の生活の中にそのような対象がいなければ、その場面は空欄になる。

このようにして得られた各場面と具体的な人物名を表1にまとめた。役職名等で答えられたケースはそのように、また名前であげられたケースは、イニシャルで示した。m. f とあるの

話者番号	年齢	場 面					
		a	b	c	d	e	f
F-1	78	役場の人		S.O f	T.H f		孫
F-2	76	見ず知らずの人		目上の人	嫁の母		孫
F-3	73	見ず知らずの人			T.H f		孫
F-4	66	T.N m		Tun.O f	Tak.O f		子供
F-5	65	見ず知らずの人	F.O m	M.U f	K. f		子供
F-6	63	見ず知らずの人		S.O m	Tu.O f		子供
F-7	62	見ず知らずの人		S.O f	T.S f		子供
F-8	62	N先生		S.O m	I.T f		子供
F-9	62	見ず知らずの人		S.O m	U.O f		子供
F-10	61	見ず知らずの人	T.O m	N.O f	No. f	Se.O f	女末
F-11	60	見ず知らずの人		A.N f	K.S f	K.O f	子供
F-12	56	目上の人			同 輩		子供
F-13	56	見ず知らずの人	組合長の奥人	Su.O f		Yos. f	
F-14	48	先生・警察 民宿の客	N.O f	T.H f	Tu.O f		子供
F-15	47	N先生		T.H f	Ka. f		子供
F-16	41	見ず知らずの人 子供の担任		S.O m	N.H f		子供
F-17	41	子供の担任		工 司	Ki.	Hi. f	
F-18	40	見ず知らずの人	N. m	M.O f	Ka.		子供
F-19	38	見ず知らずの人	Na.O f	N.H f	Y.O f		子供
F-22	31	見ず知らずの人	工 司	M.U f	S. f	O.	子供
F-26	26	役職者	近所の年寄り	T. f	A. f		めい
F-28	22	民宿の客		Tu.O f	I. f		妹
F-29	18	校長先生	担任の先生	N.S f	O. f		
F-30	17	民宿の客	男性の友人	Yo. f	A. f	Su.O f	弟
F-31	16	見ず知らずの人		担任の先生	A. f	S f	妹
F-32	15	見ず知らずの人	先生	H.O f	O. f	Ok. f	弟

は、男性、女性の略記である。(注2)

### 3. 八丈島洞輪沢集落における共通語使用の価値

洞輪沢の話者52人に場面aから場面fについて、「カケ」に当たる表現を調べた結果、今回の調査では、53種類の異なる表現が得られた。延べにすると289形式である。

そのうち、共通語による表現形式は、23種類あり、延べにすると107形式であった。共通語の表現形式と、場面によるそのあらわれを男女別に整理したのが表2である。

表2. 「カケ」にあたる共通語表現の出現数

形 式	場 面 (男)						場 面 (女)					
	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f
(1) kaite	1	0	0	2	0	1	0	1	1	3	2	3
(2) kaitejo	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
(3) kaitekudasai	21	4	3	0	0	0	19	2	4	1	0	0
(4) kaitekudasaimaseyka	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(5) kaitekure	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0
(6) kaitekurenai	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
(7) kaitekurene:	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(8) kaitekunnai	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
(9) kaitekuremasenyka	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(10) kaitemoraenai	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(11) kaitemoraenaideso:ka	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
(12) kaitemoraenaidaros:ka	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
(13) kaitemoraemasuka	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(14) kaitemoraitai	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
(15) kaiteitadakenaideso:ka	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
(16) kaiteitadakemasuka	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(17) kaiteitadakemasenyka	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(18) kaiteitadakitai	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(19) kaiteitadakitaindesukedo	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
(20) kakinasai	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
(21) kudasai	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
(22) sainjitekudasai	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(23) sainjitekuremasenyka	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

さて、これら場面aからfまでにあらわれた共通語の形式が、各場面ごとにはどのくらいの割合であられるかを計算し、図示したものが、図1である。男女別に、パーセンテージであらわして、それぞれの数値は表3に示した。

これら表2、表3の資料にみる、共通語使用の意味を、表1に示した使用する相手に関する資料を参照しながら、考察していきたいと思う。

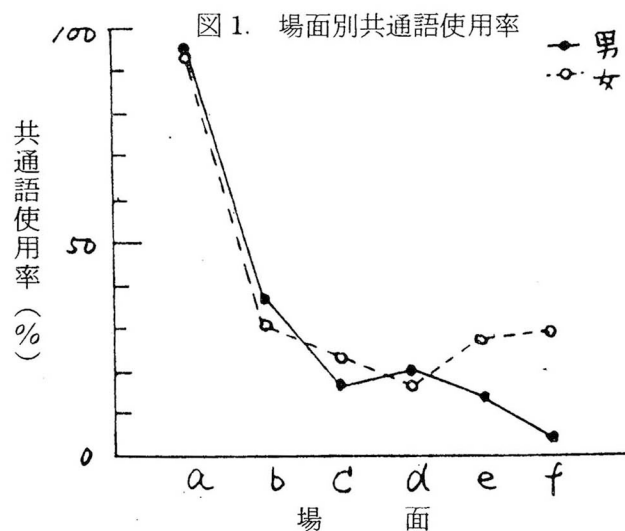


表 3. 場面別共通語使用数

		場 面					
		a	b	c	d	e	f
男	共通語使用数	29	7	5	6	2	1
	(%)	(96.6)	(38.8)	(17.2)	(20.2)	(14.2)	(5.5)
	総 数	30	18	29	30	14	18
	(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
女	共通語使用数	28	4	7	6	3	9
	(%)	(96.5)	(30.7)	(22.5)	(18.1)	(27.2)	(29.0)
	総 数	29	13	31	33	11	31
	(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)

図 1 のグラフからは、次のようなことが傾向として読みとれる。

- ① 場面ごとの共通語の出現率をみると、場面 a は、ほとんど共通語系統の表現が占める。  
(以後、「共通語系統の表現」を「共通語系」、いわゆる「方言」系統の表現を「方言系」と略すことがある。)
- ② 場面 b 以下では漸減しながら、ほぼ一定の共通語の出現率を保っている。
- ③ 場面 e、f では、女性の方が男性より若干高い共通語の出現率を示している。

さて、自分が一番ていねいに話すと意識しているこれらの場面 a に当たる人に対しては、図 1 によれば、ほとんどの人が共通語を用いていることがわかる。

a のように高い場面に共通語が非常に多くあらわれ、場面 b、そして場面 c 以下という具合に減少していくことをみれば、それだけで、共通語がていねいな表現として機能していることは、ひとつ予想がつく。しかしながら、少なくとも場面 a での多用は質問票の場面 a で、「島のことば、標準語ということをおらず」として、共通語にある程度意識を向けた結果であるともいえよう。そこで、表 1 に示した調査結果を参照しながら、別の点からの実証もすすめていくことにしたい。

それでは、まず、①②にみられる結果をめぐって、考察を進めていきたい。

表 1 の資料をみられたい。場面 a にあげられている人物、言い換えれば、自分が一番ていねいに話すと意識している人物は、洞輪沢では、「見ず知らずの人」、「役場や警察の人、仕事上の上司や客」、「先生」などが多い。

では、場面 a であげられたこれらの人物のうち、まず「見ず知らずの人」に対する共通語使用を考えてみたい。

「見ず知らずの人」とは、観光等で島を訪れた島外の人をさしてあげられた場合が多く、いわば「島のことば(島ことば)」を話さない人達である。共通語の方が方言よりもていねいな言い方だと意識している人が多い、という地域もあるが、ここ洞輪沢では必ずしもそうは考えられてはいない。

これら「見ず知らずの人」に対しては、島ことばが通じないから共通語で話しかける、という類の発言が何回か聞かれた。

また、この「見ず知らずの人」たちは、その質を問わないにしてもたいていが、共通語をもって話す人たちであると考えられる。相手の使用する言語も、また、話しを交わす際の、言語選択に影響を及ぼす要因であることを考えると、場面 a でこのような人達にむかって使用される共通語には、次のような2つの意味がある、言いかえれば、次のような価値で、共通語が使用されると考えることができるかと思う。

(1) 相手に、こちらのことばが通じないから共通語を使用する。

(2) 相手が共通語を話すのに合わせて、共通語を使用する。

さて、場面 a には、ほかに「役場の人」や「警察の人」、「先生」、「仕事上の上司や客」があげられている。そしてこれらの人に対しても、カitekダサイや、カiteイタダキタインデスケド という共通語系の表現が使用されているのが観察された。

民宿の客などは島外者がほとんどである。また、警察官には島外者の赴任が多く、先生の中には島外出身者も含まれるが、今あげたこれらすべての人が島のことばを話さない島外者というわけではない。そこで、「見ず知らずの人」にみたような分析に準じては考えられない意味も含んでいると予想できる。

それに関して考察するために、少し視点をかえたところで例をあげて、分析を試みることにしたい。

今からあげる(イ)から(ロ)の3例にみる人物は、次のような人物である。M氏、T氏、N氏という三氏は、在外歴はあるとしても末吉の出身者で、現在、末吉在住者である。両親の少なくとも一方は、末吉出身者であり、三氏は、職業的にもある程度の身分を持ち、村内でもある程度の地位を保っている。「島ことば」は当然理解し、使用能力を持っているが、しかし、日常は、共通語系のことばづかいをすることが多いとまわりからはみられている人物である。

さて、これら三氏が、待遇的に場面 a に相当する人物と意識されたり、場面 b、c、d に相当すると意識されたりすることがある。それは、話者自身の持つ属性とこれら三氏との関係が検案されて、それぞれのケースが生まれると考えることができる。(注2)

このように、同一人物が、話者によって異なった待遇的場面として意識された場合、それに対して用いられる言語はどのような対応を示すかを例示してみた。それが(イ)から(ロ)の3例である。

(イ)のM氏の場合は、話者M-1では場面 a に、M-7、M-13では場面 b に、M-20では場面 c として待遇的に意識されている。M-1・a (話者M-1の場面 a。以後このように略記する)、およびM-7・bではM氏の役職者名で、M-13・b、M-20・cでは、名前を呼ば

れてあげられている。(イ)にならって(ロ)のT氏、(ハ)のN氏の場合をあげる。

(イ) M 氏

- M-1・a kaitekudasai
- M-7・b kaitekudasai
- M-13・b kaitekudasai, kaitetamo:re
- M-20・c kaitetamo:re

(ロ) T 氏

- M-4・a kaitekudasai, kakinasai
- M-9・a kaitekudasai, kaitetamo:re
- F-11・a kaitekudasai
- F-10・b kaitetamo:re
- M-8・b kaitetamo:re
- M-19・b kaitetamo:re
- M-3・c kaitekuure
- M-7・c kaitetamo:re
- M-1・d kudasai

(ハ) N 氏

- F-4・a kaitetamo:rijare
- F-18・b kaiteitadakemasuka
- M-10・b sainjitekuwaremasenka, kaitetamo:rendaro:ka
- M-9・d kake

これらの資料の中から、(ロ)M-3・cと、(ロ)M-1・d、(ハ)F-4・aをまず除こう。M-3は、ふだん共通語しか話さないといっている人物であり、この調査でも共通語系の表現しかあらわれていないからである。またF-4は、「共通語が話せない。話せないから、島外の人とも島のことばで話す。」と述べた人物であり、この資料中でも、共通語系の表現は一例もあらわれていないことが確認されている。M-1は、M-3と異なり、むしろよく方言を使用すると回りから目されているが、この資料では、共通語系の表現しかあらわれていなかった。いまは、「共通語と方言」の問題を論じているので、使いわけのみにあらずこの3人を除くのである。

さて、そうしたところで、同一人物が、異なる場面として意識されたこの資料を考えてみたい。

場面と言語表現とのかかわりを観察すれば、三氏が、場面aに意識された場合は共通語系が使用されることがほとんどである。場面bでは、共通語系、共通語系と方言系の併用のほかに、方言系のみが使用があらわれる。さらに場面c・dに意識された場合は、方言系のみが使用されている。

このように、同一人物でも、意識される場面の高低によって、使用言語に異なりがあること



がわかる。M-9・aに併用として方言系がみられるが、傾向的には、同一対人が高い場面に意識されるときは共通語系の表現が用いられ、より低い場面として意識されるときは方言系の表現が使用される傾向が見出せるといってよいだろう。

さて、これら三氏は、日常、いわゆる共通語的なもの言いをする人物としてみられていることはすでに述べた。また、先にも述べたように、相手の使用する言語も、言語選択を行なう際に影響を与える要因であるとしたら、これら三氏は、「共通語を話す」と意識されていることで、話者もまた共通語で話しを返すという事態を十分予測させるわけである。しかしながら、結果は、今みたとおり、待遇を意識する度合（場面）の高低によって、共通語か方言かが使い分けられている。これはつまり、言語選択の際には相手の話す言語という要因は、相手を待遇的にどのような場面として意識するかという要因より弱いものであることを物語っている。

そこで、共通語がていねいな表現として機能していることは前述したように図1からそのままに分ることではあるが、この三氏の例からよりはっきりと実証されたといえよう。そこで、共通語の使用のされ方に、次の(3)を加えることにしたい。

(3) ていねいな（待遇価値の高い）表現として共通語が使用される。

また、先にふれたM-3や、ここには資料としてあげてないが、その他数人の話者に、場面aからfのすべてに共通語系統の表現が使用されているのが観察された。これは、話者が日常共通語を自分の使用コードとしていることの反映とみてよいであろう。そこで、洞輪沢での共通語使用には次のような側面も認められる。

(4) 日常の使用コードが共通語化している。

なお、場面aにみられた「役場の人、警察の人、先生、仕事上の上司や客」について解釈を留保してきたが、(1)(2)の他に、(3)のような側面での使用が認められるだろうと考えてよいであろう。

さて、共通語系の表現はなにも場面aにみられるばかりではない。図1、表2からは、場面bからfまで共通語が使用されていることがわかる。

場面b以下では、島外者はほとんどあげられていないので、基本的には、(3)(4)、あるいは(2)の意味での使用ということができると思う。

では次に、図1にみられる、先の③の現象、すなわち、場面e、fの、女性にやや多くあらわれた共通語系の表現について少し考えてみたい。

場面eは、設定数がそもそも少ないので、場面fを中心に観察していくことにしよう。

場面fにおいて、女性では、カイトという表現が3例、カキナサイが5例、カitekダサイが1例みられた。場面fとしてあげられた人物は、これら9例のうち8例が自分の子供、1例が孫、1例が妹である。

次のF-3のような場面は、(1)や(2)の用法と考えることができると思う。

F-3において、小学生の孫が場面fとして意識されているが、この人物に対して共通語を使用する場合である。F-3は、孫が共通語しか話さないため、自分も共通語で話すのだと答えている。そこで、この場合には(1)や(2)の用法と考えることができる。

さて、このF-1の例以外はどうかであろう。男性は、場面fでは、そのほとんどがカケという表現を用いている。それに対して女性にはなぜ、これらの共通語系の表現が多くみられるのだろうか。また、その共通語使用はどのように解釈されるのだろうか。女性でも約6割の人がカケという表現を場面fではしており、カケは、女性でも十分使用しうる方言系の表現である。

これの解釈には次の結果が手がかりになるだろう。待遇価値からみて、形式に高低の順位があるとしたら、同一場面では、男性より女性の方がより待遇価値の順位の高い形式を多用するという結果が、これを含む一連の調査で認められた。(注4)

それでは、洞輪沢において、方言系の表現カケより一段階待遇価値の高い表現は何かといえ、カイケロがそれに当たる。

ところが、カイケロという表現は、女性にやや回避される表現なのである。(注4)

ならば、カイケロよりさらに一段階待遇価値の高い表現は何かといえ、カキヤレがそれに当たるが、カキヤレはもはやその待遇価値の高さからいって、下位者に対しては不適当な表現になってしまう。そこで、その空き間に、カキナサイ、あるいは、カイケという共通語系の表現が入りこんだのではないだろうか。

そのように考えると、女性の場面fにみられる共通語系の表現は、同一場面で使用されている方言系の表現と比較すれば、待遇的には一段階上の表現として認めることができる。すなわち(3)のような用法といってよいだろう。

以上、洞輪沢集落におけるこの調査結果からわかることでは、共通語の使用価値は、(1)から(4)の4つの側面を認めることができるといえよう。

#### 4. ま と め

以上、まとめると、洞輪沢での「カケ」という表現においてあらわれる共通語使用は、次のようにとらえることができる。

- (1) 相手にこちらのことが通じないから共通語を使用する。
- (2) 相手が共通語を話すのに合わせて共通語を使用する。
- (3) 方言系の表現より、より待遇価値の高い表現として共通語を使用する。
- (4) 日常の使用コードが共通語化している。

(1)のような用法では、「通じないから」ということが大前提となり、方言体系の待遇価値体系との比較は行なわれておらず、むしろ、二言語併用的な使用とみることができよう。

それに対して(3)のような用法では、共通語は、もはやその土地の方言体系と対峙するものではなく、ひとつの機能を担うものとして方言の表現体系の内にとりこまれ存在しているとみてよいであろう。

(1)のような用法は、受け入れた方言が「八丈島方言」であったという点が働いているかと思う。また、具体的に個々の場面で使用される共通語には、これらのうちどれかひとつの意味で使用されるというより、いくつかの用法が重なって共通語使用が実現されていることが多いであろう。そうした実際の使用の基底にこのようないくつかの意味、価値を内包しているという

ことである。

メディアの発達によって共通語の広がる波は強く激しい。それにともなう方言の衰退が注視され始めて久しいが、一方、ひとつの方言が、そっくり共通語にとりかわる（共通語化する）ということもまた、ない。

そこで、方言が共通語と接触する状況がたえまなく起こっている現在、共通語が方言体系との摩擦の中でどのようにとりこまれ、どのような価値をもって機能する存在となるかは、これからも折にふれとりあげられるテーマとなるであろう。

方言と共通語の接触の問題は、従来は、アクセント、音韻、文法項目などにしても、語彙的単位での共通語化として扱われることがほとんどであった。

本稿では、使用場面での観察から、コードとしてとらえた共通語の使用価値を研究した。もっとたくさんの例にあたるとともに、受け入れる方言体系によって生じるであろう共通語の価値の差異についても、比較検討を行なっていきたいと考えている。

（注1）拙稿「待遇表現における男女差——八丈島末吉洞輪沢集落の全員調査から」『日本方言研究会第28回研究発表原稿集』（1979<sup>5</sup>）P. 15～16を参照いただきたい。

（注2）洞輪沢における対人場面の形成については、拙稿「八丈町末吉洞輪沢における対人場面形成の要因」（『日本語研究3』）にまとめた。

（注3）南不二男・林大・林四郎・芳賀綏「敬語の体系」（『敬語講座① 敬語の体系』P. 151）等に指摘されている。

（注4）拙稿（1979<sup>5</sup>）P. 20、図2参照。これについては、いずれ稿を改めて記したい。

#### 〔付 記〕

本稿は、第28回方言研究会発表および、修士論文でまとめたところの一部を加筆・再構成したものである。

なお、本稿は、第5回長野県ことばの会での発表と一部は同一の資料を使ったものであり、内容的にも関連している。

本稿が成るに至るまで、多くの方々から有益な御意見を賜りました。記して感謝申し上げます。

1980. 6

（東京都立大学大学院 博士課程学生）